



## 👁️👁️ みどころ

党幹部や政府要人への「接待」と、それに伴う腐敗・汚職を防止するべく習近平政権は「贅沢禁止令」を出した。しかし、中国でも最も貧しい雲南省にある標高3200mの洗羊塘（シーヤンタン）村の三姉妹の生活は？

靄齡・慶齡・美齡という「宋家の三姉妹」やお市の方が産んだ茶々・お初・お江という「浅井の三姉妹」は有名だが、「雲南の三姉妹」は王兵（ワン・ビン）監督のカメラが無ければ世に知られることはなかったはず。

『鉄西区』の9時間5分も観るのはしんどかったが、本作の2時間33分も同じ。しかし、それでも本作は必見！やはり現実とは現実として直視しなければ！そして、そこからあなたは何を感じ取る・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ 同じ三姉妹でも、雲南の三姉妹は・・・？ ■□■

「三姉妹」といえば、日本では織田信長の妹であるお市の方が嫁いだ近江の名門、浅井長政との間に生まれた茶々・お初・お江の三姉妹が有名。それぞれ数奇な人生を歩んだこの三姉妹の物語は、何度も映画やドラマで取り上げられている。他方、ロシア文学では、チェーホフの「三人姉妹」が有名だが、中国では何と言っても「宋家の三姉妹」。長女は「富を愛した靄齡」、次女は「国を愛した慶齡」、そして三女は「権力を愛した美齡」の三姉妹だ。張曼玉（マギー・チャン）や楊紫瓊（ミシェル・ヨー）、そして姜文（チャン・ウェン）などを起用し、張婉婷（メイベル・チャン）監督が壮大なスケールで描いた映画『宋家の三姉妹』（97年）は、絶対のお薦め作品だった（『シネマルーム5』170頁参照）。それに対してドキュメンタリー映像作家として独自の路線を歩んできた王兵（ワン・ビン）監督が本作で描く雲南の三姉妹は？

雲南省にある麗江、昆明、大理などの美しい観光地は外国人観光客を魅了するが、10歳の長女・英英（インイン）、6歳の次女・珍珍（チェンチェン）、4歳の三女・粉粉（フェンフェン）が住むのは、中国で最も貧しいと言われている雲南省の標高3200mの高地にある洗羊塘（シーヤンタン）村。浅井の三姉妹、宋家の三姉妹などの「三姉妹もの」は、夢とロマンいっぱい歴史大作だが、それに対してこの「雲南の三姉妹」は、それとは全然違う極貧の世界のドキュメンタリーだ。



6月上旬梅田ガーデンシネマ、順次京都シネマ、神戸アートビレッジセンターにて公開  
©ALBUM Productions, Chinese Shadows

## ■□■ 『無言歌』 もすごかったが、本作も！ ■□■

王兵（ワン・ビン）監督の『鉄西区』（03年）は、三部構成で9時間5分という超長編ドキュメンタリー。オールナイトで観るのも大変だったが、同時に充実感もタップリだった（『シネマルーム5』369頁参照）。そして、そんな王兵監督初の長編劇映画が『無言歌』（10年）だった。1960年代の「反右派闘争」の犠牲とされた主人公たちを描くそのストーリーは、五味川純平の代表作を小林正樹監督が映画化した『人間の条件』（59～61年）（『シネマルーム8』313頁参照）以上の過酷さで涙を誘うものだった（『シネマルーム28』77頁参照）。

胡錦濤から習近平への権力移譲が完了した中国では、若い頃に「下放」された習近平が、陝西省延川県の貧しい村で生活しながらリーダーシップを発揮していく姿がドキュメンタリー的にテレビで放映されていたが、本作冒頭に描かれる、父親が出稼ぎに行っているため三姉妹だけで過ごしている風景は、それを見ているだけで思わず涙がにじんでくる。食事はジャガイモだけ。家畜の世話と畑仕事で生計を立てているらしいが、穴の空いた長靴

を履いている珍珍は、そこに水が入り靴が縮こまってしまったから大変。また、一度も服を洗濯したことのない粉粉は、シラミだらけで、退治しても退治しても全身がかゆいらしい。そんな二人の妹を黙々と世話している長女の英英は、言葉少なく、意志の強そうな目をしているが、ホントは父親にも甘えたいだろうし、小学校に行行って勉強もしたいし、友達とも遊びたい年頃のはずだ。

日本では、「格差、格差」と言われ、若者の貧困化が大きな社会問題となっているが、本作を観れば「日本の若者よ、何を甘えたことを！」と、つい叫びたくなってくる。王兵監督が回し続けたカメラからスクリーン上に映し出される雲南の三姉妹の姿は決してあるべき姿ではないが、2010年から2011年にかけて雲南省の洗羊塘村に現実にあった世界であることをしっかり確認する必要がある。



6月上旬梅田ガーデンシネマ、順次京都シネマ、神戸アートビレッジセンターにて公開  
©ALBUM Productions, Chinese Shadows

## ■□■中国は「一人っ子」政策ではなかったの・・・？■□■

「宋家の三姉妹」は豊かな家に生まれ、教育もしっかり受けることができたが、それは新生中国が成立する前のごく一部の特権階級なればこそのお話。1949年に中華人民共和国を成立させたものの、新生中国は毛沢東が指導した路線の誤りもあって、大きな飢えを経験した。しかし他方で、人口増に苦しむ中国は、1979年から「計画生育」つまり「一人っ子政策」を採用した。とすると、一組の夫婦には子供が一人しかいないはず。なのに、なぜ英英、珍珍、粉粉は三姉妹なの？中国についてあまり知らない日本人はそう不思議に思うだろうが、「計画生育」は地方や民族によって扱いが変わるし、罰金を払えば二人目もOKという制度もある。しかも、中国では男の子が欲しいという気持が日本より強

いため、一人目が女の子の場合は、「罰金を払ってでも、二人目は男の子を！」という期待で二人目を産むことがあるらしい。すると、本作の場合は・・・？

それはともかく、農村において男子が尊重されるのは「後継ぎ」という面の他、「働き手」という面もあるから、期待に反して2人目も女、3人目も女だったらその両親は？本作では中盤から「雲南の三姉妹」の父親が二度登場する。一度目は、経済的な問題から長女・英英だけを残し、妹の珍珍と粉粉を連れて町に出ていくことを相談するために出稼ぎから三姉妹の元へ戻ってきた時。二度目は、やはり出稼ぎではうまくいかなかったために、珍珍、粉粉の他、新たに子守の女とその娘を連れて洗羊塘村に帰ってきたときだ。これらのシーンだけを見ると、父親は三姉妹に対して優しくそうだが、プレスシートを読むと、当時37歳だった父親はその性質に暴力的なものを持っていたそうだ。そのため、彼の妻は3人の子供を捨てて洗羊塘村を出てしまい、以降妻からの連絡はなくなっただけらしい。プレスシートに書かれているそんな「映画の背景」を知ると、ますます雲南の三姉妹の立場から言えば、両親に対して「お前ら子供を産みっぱなしかよ」と言いたくなるどころだが・・・。



6月上旬梅田ガーデンシネマ、順次京都シネマ、神戸アートビレッジセンターにて公開  
©ALBUM Productions, Chinese Shadows

## ■□■祖父は？伯母さんは？大伯父さんは？■□■

もちろん、洗羊塘村に英英、珍珍、粉粉の三姉妹だけが住んでいるわけではなく、この村には2011年の当局の統計によれば、約80戸、470人強の村民が生活しているそうだ。また、高地に暮らす村民の貧困を解決するため、洗羊塘村は当局によって低地への全村移住が決まっているものの、誰がどこへいつ移住するかはまだ決まっていならしい。そこにカメラを持ち込んだ王兵監督は中国当局の許可を得ないまま、フランスと香港の製

作会社で本作を製作したらしい。

そんな状況下で、彼のカメラは、冒頭から続いていた三姉妹だけの生活から次第に視点を広げていく。その第1は、父親が珍珍、粉粉を町へ連れて行った後の英英と祖父との生活、第2は、英英と伯母さん家族との生活、第3は、英英が小学校に通って勉強する様子、そして第4は、大伯父さんの家で開かれた収穫を祝う宴に参加する様子だ。これらを見ていて母親から捨てられ、父親とも離れざるをえなくなった英英が必ずしも一人ぼっちではなく、極貧ながらも洗羊塘村の共同体の中で生きていることがよくわかる。しかし、小学校で梅蘭芳の生涯をみんな揃って声を上げて読んでいる貧しい授業風景を見ていると涙が出てくるし、祖父から、娘は勉強よりも家の仕事を覚える方が大切だと言われるシーンを見ているとまた涙が出そうになってくる。さらに、大伯父の家での豪勢な宴が終わった後の、「農村復興」や「医療保険」をテーマとした村民たちの議論で、100元を支払うことの大変さを訴えるシーンを見ていると、近時の豪勢な中国旅行に慣れてきている私には・・・。

王兵監督は本作で何も声高な政治的主張はしていないが、淡々と続くそんなシーンを見ていると、誰でも深く考えさせられるはずだ。

## ■□■正直、2時間33分はしんどいが・・・■□■

本作はドキュメンタリー映画だから、あっと驚くアクションや練りに練った洒落たストーリー展開があるわけではない。また、気の利いたセリフもないし、雰囲気盛り上げる効果的な音楽が流れているわけでもない。前半かなり耳につくのは、4歳の三女がわがままを言って（？）泣き叫ぶ声だが、2人の姉は慣れたもので、これを無視。贅沢三昧に育った中国の現在の「小皇帝」（一人っ子）なら、泣き叫べばきっと両親やおじいさん・おばあさんがご機嫌を取り、アメの1つも与えてくれるのだろうが、雲南の洗羊塘村では様相は全く違っている。

本作は2時間33分と長尺だが、そこで一貫して目につき印象に残るのは、とにかく黙々と働く英英の姿といかにも意思の強そうな英英の目。下の2人が女の子か男の子かわからないような顔をしている（失礼？）のに比べれば、英英は髪の毛も長く一見して女の子だとわかる。そして、決して美人とは言えないが、一目見た時からその顔は決して忘れられないはずだ。しかして、それは一体なぜ？

もう一つ、本作後半に耳に残るのは、英英が家畜の世話や畑仕事をしている時、さらに近所の少年・永高（ヨンガオ）たちと共に馬糞拾いの作業をしている時に聞こえてくるビュービューという風の音だ。標高3200mの高地といえば、風が強い時は結構すごいだろう。スクリーン上で淡々と描かれるのは、一貫してそんな洗羊塘村に住む三姉妹たちの生活実態だ。したがって、そこには当然それなりの構成と編集がされ、それなりのストーリーの流れはあるものの、本作は決して観ていて楽しい映画ではない。逆に9時間5分の『鉄西区』の時もそうだったが、正直言えばスクリーンをじっと見ているのはしんどい。しかしそれでも、私の本作の採点は星5つ。それは一体なぜ？正直2時間33分はしんどいが、それでもやはりこんな映画はしっかり自分の目で見て、何かを感じとらなければ・・・。

2013（平成25）年4月30日記